

恤の業多く 令旨を待ちて舉り 女子教育の基寔に 惠衷に頼りて立つ
姜后或は比ぶ可く 長孫何ぞ道ふに足らん 我校の創設せらるゝや
首として内帑を發き以て費用を飲け新築の竣成するや載ち 軒駕を拄け
而して榮輝を垂れ 曾て 睿艸を賚ひ 數々 德音を降し給ふ 星霜四
十稔 臨御十一次 慈仁の澤は滄溟よりも深く 勸奨の恩は峻嶽よりも
高し 女校の鬱興往古に邁ぎ 才媛の輩出來今に盛なるは 懿德に頼る
に非ずんば 惡ぞ能く茲に臻らんや 既に芳澤の餘り有るを佩し 益々
寶算の疆り無きを祝しまつりき 寧ぞ料らん閔天弔せず 上仙攀づる
なからんとは 玉趾の跡を九重に絶ち給へるを嘆き 瓊姿の再仰に由な
きを慨む 翠辮を瞻れば 肝腸斷絶し 蒼穹を望めば涕泗滂沱たり
血涙を毫端に濡し 丹悃を楮表に馳す 嗚呼哀いかな

新大正三年五月二十四日

現代文明と精神生活（講演）

得能文

閣下及諸君。今日私がこの席に出て一場の御話をするのは私の光榮とする處である。就ては何か實のある御話をする筈であるが、大した御話も出來ない、この點は誠に汗顔の至である。先日垣内先生に申上て置いた題目は甚だ大袈裟で、何か非常に大きな事の様であるが、實は題丈が大きいので内容は至つて貧弱であるから其御積りで御聞き取りを願ひたい。

先づ第一に文明と云ふ事であるが、文明とは一體如何なる事であるかと云ふと、天然自然の世界に對して人間が何か力を加へる、之が即ち文明である。我々が日常用ふるものに我々の力の加へてないものは一つもない。例へば一杯の水も、それを我々が飲む迄には中々多くの人手がかかる、堀井、水道、汲む器、持つて來る器、飲む器、凡て我々の力で何等かの形を與へて、そして其用に供するのである。又日常の食品にしてもさうであつて、一粒の米もそれにかけて手数は莫大なものである。衣服も住居も凡て我々の力が加はつて初めて用ゐ得らるゝものである、即ち我々が人間の力で天然物に何等かの形を與へて生活の内容とするのである。而して我々の生活を形作る方法には時代によつて其特質がある。ギリシヤの如きは藝術的に形作つた故、

之を藝術的文明と云ふ。歐州の中世は、宗教的文明と云はれて居る、即ち其作り方が宗教的なのである。今日の歐州文明は、前に云つた様に藝術的文明でもなく、宗教的文明でもなく、科學的文明である。十九世紀の偉大な産物は、科學の發達と云ふ事である、其他に歴史の研究の盛であつた事も其特色ではあるが、あらゆるものを覆ふ勢の發達は科學であつて、如何なる題目も凡て科學的に研究せられる様になつた。この科學の勃興に依つて、生活内容は次第に豊富になり、凡てのものが其方面に形造られる様になつた。科學的文明は至る處に其形を現はして、我々の精神も科學的に研究され、心理學なども實驗的經驗的となつて、實驗的心理學が發達して來た。藝術の研究も心理學に基き、宗教の研究其他のもの、研究も、凡て同様となつた、其結果として、精神上の産物は、凡て心理學によつて、説明せらるべきものであるとする、つまり科學萬能の状態となつた。

然らば、元來科學とは如何なるものであるか、又其研究法は如何と云ふと、先づ第一此の科學は研究する所の自分を離れて、研究せんとする所の客觀丈について、分析するのであるから、此の點から云ふと、研究的主體である「我」を離れると云ふ點は抽象的で、即ち「我」を忘れて研究する對象のみを見る、之が其方法上の第一の特色である、従つて我々の直接の經驗は、科學的研究の對象にはならないのである。第二に個々のものを捉へて、其共通點に依つて一般の法則を見出す事であつて、之が第二の特色である。かういふ方法は、科學的研究を施す領分では確實であるが、この方法を以て其領分を飛び越えて、人生の問題に持つて來ると、其處に非常な困難が起るのである。然るに十九世紀の中頃から後、科學の盛な勢に乗じて、この科學の領分の如何なるものであるかを顧みずして、科學によつて人生及び世界の問題を解釋し、科學其物によつて、世

界觀、人生觀を得ようとして、大なる困難に遭遇した。科學では一般の法則を作る事が主張であるから、個々のものは眼中にないのである。然るに我々の眼に映するものは、抽象的のものであるか、具體的のものであるかと云ふに、例へば此處に在る花にしても、一個の花として眼に映する、つまり個々の具體的なものとして、眼に映するのである。然るに一般的法則は、概念的のものであるからして、この一般的法則は、具體的のもの、説明にはならない。且科學によつて、物の價值を定める時は、最も困難を感じる、例へば人間にしても、聖人もあれば、凡人もある、善人もあれば、惡人もある、之等の價值の差別は、科學上如何にして定めるか、或は如何なるものが聖であり、賢人であり、英雄であり、凡人であるかと云ふ一般的事は云ひ得るか知らぬけれども、一個の人格を捉へて、其價值を定める時は、どうしたらよいか。例へば孔子の聖たる所以は、どうして定めるか。一般の法則に従つて見る以上、何人でも人としての價值に異りはない、即ち生理學者・解剖學者の目から見た人間は、皆同一である、科學者の眼中には、價值の區別はないのである。それ故個々の價值は定め難い、奈翁なり、孔子なりが、如何なる人格的價值を有するかは、生理學者も解剖學者も知る事は出来ない、それ故自然科學者から見た人間は、ごんぐりの背競べの如く、皆同じである、即ちこの科學的時代に於ける人間は、皆平等である、聖凡、賢愚、善惡、美醜と云ふ様な、價值的區別は出來ないのである。又法則を立てる事が主眼であるから、凡てを平等に見る、従つて一切の凹凸は無くなつてすべて平板なものとなつてしまふ。茲にデモクラティックの思想が起るのであつて、物事を分量的に考へる。又た人間は凡て自然の法則に支配せられることになるが故に何等の自由も自發性も無いことになる。かうなる世界は、凡て平板凡庸なものとなつて、何の味もない淋しいつまらない心地になつて來る。かういふ事が十九世紀の

科學的文明の盛になるにつれて、人々の間にぼつ／＼感ぜられて來た、そしてニイチエが起つて價値の轉倒を叫んだ、最も之はこの文明に對する反動の聲であり、其氣分丈であつて、別に理論的に組織したのではなかつた。而し次第に科學的研究丈では、人間の生活の意味が充分にならぬ、生活の内容と價値とは、かゝる科學的方法によつては明らかにならぬ、一般的法則を作り上げるのみでは満足し得るものは出來ぬ。斯う云ふ考からして科學的文明に對して別の思想が次第に盛になつて來た、それには種々あるが、今日の所では其重なるものが二つ程數へらる。

第一は方法上より云ふものであつて、科學的方法では到底眞の人生の内容價値を説明する事は出來ないから、何か別な方法でしなければならぬ、といふのであつて、第二は方法上からでなく、科學は科學としての領分を守り、それ以上もつと根本的に、科學以上の領分、世界がある、即ち形而上學的の領分がある事を認めて行くやり方である。

其方法の上から見るやり方は、科學の様に一般的法則を作るのとは反對に、個々のもの即ち具體的のものを捉へて見るやり方をしなければならぬ、例へば奈翁を理解し様とする時、科學的に如何に生理的・解剖的に見ても、理解する事は出來ない、奈翁の奈翁たる價値は、彼の一生の仕事である、即ち彼の歴史である。故に一の具體的のものを捉へて、其意味を表はすには、歴史的に見なければならぬ、と云ふのである。其考によると、つまり歴史は一度しかない、繰り返すはないものである、科學の方の取扱ふ方法は同じ事が何處迄も繰り返すものである、而るに奈翁の歴史・秀吉の歴史は決して繰り返すはない、一つのユニークなものである、それを捉へて研究する事によつて、價値を見出す事が出來る、さうでなくは到底其意味を理解する

事は出來ないので、一般的法則はそれを利用するにはよいであらうが、個々のもの、價を知る事は出來ぬ、況んや人生の内容價値を見るに一般的法則などでは駄目である、ユニークなものを歴史的方法で見たいものでなければならぬ、か様にして捉へ得た處の奈翁の價値は何人も認めて、そして永遠に變らぬものである、とかう云ふ考によつて、漸次研究を進めて世界觀を立て様とするのが、西南獨乙學派のウィンデルバンド、リッカルト、ラスクなどである。これは歴史的個體を捉へて行くやり方であるが、歴史的個體は決して科學者の原因結果の法則や、進化論者の發生學で、説明する事は出來ぬ、人間の價値そのもの、否人間に限らず凡ての物其物に、價値を認むる事に就ては、歴史的方法に依るのであるが、夫れに就て人間には價値意識、即ち物の規範を定むる意識が備つて居る、この規範意識は時間を超越して居る不變の實在である、さうしてそれによつて物の存在が出來る、存在があるから價値があるのではなく、價値があるから存在すると云ふのである、即ち普通に云つて居るとは反對である。少し話が横へ外れて、工合が悪くなつたが、この規範意識は凡ての個人に備つて居るので、且最も確な經驗的實在であつて、時間空間以上に超越して居る理想である。理想は我々の生活の案内となつて、我々の生活を導くものである。我々は之を追うて生活して、初めて我々の生活に意味を有し、價値を認める事が出來る、この永遠の世界・價値の世界が自然科學の云ふものより以上になりと説くのがオイケンの説く精神生活である。この精神生活と云ふものは西南學派の云ふ永遠の價値の世界と同じである、即ちこの自然科學的に取り扱ふのとは異つた方法で見ると、其處に初めて眞・善・美の具備された理想の世界がある、之を精神生活と云ふ。一体、精神生活の語は普通に二通りの意味に用ゐられる、廣義では我々の思想、又其思想に依つて作り出された凡てを總稱するのである、而しオイケンの云ふ意

味は狹義であつて、そんな簡單なものではない。この我々の個人的經驗的の心の現象よりも、もつと勝れた奥深い眞の價値を有する永遠の世界、價値の世界を指すものである。而しこの世界は時間空間の上に在る世界とは異つて、時間をも超越した一種の生命か、我々の日常の經驗的感覺的生活よりも、偉大な價値があるとしたものである。オイケンが之を力説し様として先づ攻撃したものは、科學的的人生觀即ち自然主義である。之は人間の自然界の産物、自然界の一部分に過ぎぬと考へる、さうして人間は憐な一生存物として、自然界の凡ての物と同列の物である云ふ考によつて、科學の一對象として見るのである。オイケンは之に對しては極力反對して居る、自然科學に基ける人生觀ほど、我々の生活の内容を無くするものはないのである、かく考へる時我々の精神の奥底は満足し得ざる何等かの欠乏と空虚とを感じる、之はやがて我々が單なる自然物でなくもつと深奥な勝れたものがあると云ふ證據である。我々は果して自然物の一種に止まると云ふ様な單なる平凡なるレベルに引き下げられて満足出来るか。我々のライフは、平凡なもの以上に高まる事が出来るか。夫れを知るには、我々のライフを見れば知れる、即ち我々のライフは自然の産物以上のものである、さうしてもつと高いもの、もつと深いものたらんとして悶搔て居るのを見れば、レベルよりも高くなり得るものである事は知れる、かくもつと高め様、もつと深め様とする結果として其處に努力を生じ、新しい生活は初まる。この努力この新しい生活は我々の藝術・宗教・道德・其他あらゆる方面に出て來るのである。我々の生活は進化論者の云ふが如き、外界に適應するのみではなく、外界をして適應せしめるのである。即ち受身になつて外界に順ふのみでなく、外界を征服して、外界をして順はしめんとするものである。故に我々は常に何等かを作り上げてゐるので、世界は我々の作り上げべきものである。即ち我々は單なる自然物に止

まらず、夫れ以上のものであると云ふ證據である。この働をなすものを、オイケンに精神生活と名付けるのであつて、之が無くては我々は自然を征服する事は出来ない。この時間空間を超絶した永遠の價値普遍的の價値そのものか我々の生命の根本となつて、我々のライフは之によつて動かされて居るのである。さうして之を意識しない間は、單なる自然物の一部分として、自然物と同様なものとして怪まぬ、若し一旦意識して努力すれば、其人のライフには偉大な生命か表はれる。即ち一度不満足を感じてもつと高いもの、もつと深いものをもつと努力する様になつて、初めて我々の精神生活は出来るのである、そしてこの精神生活が、個人に表はれると、初めて眞の人格、眞の自由を得るのである。若しさうでない、唯外界の刺戟に應ずる丈の自然物に止まり、眞の自由を得眞の人格の光を現はす事は出来ぬ。我々はこの精神生活によつて偉大なる、永遠なる價値を、其生命に表はさねばならぬと云ふ、之がオイケンの考である。

然らば従來の理想主義とは、如何なる差異があるかと云ふと、従來の理想主義は稍もすれば世界は理想的に出來て居るものである、不完全に見えるものがあつても實はさうではなく、却つて他を完全に爲す爲である、例へば大きな音樂の内に一つの不調和な音があると、却つて全體が一層調和される様なものであると云ふ。オイケンはこんな生温い事では決して満足出来ない、我々は現實を忘れて茫漠たる雲霞の様な理想に進む事は出来ぬ、現に我々の頭上には飛行機が飛び、地上には汽車、水上には汽船が走つて居るではないか、十九世紀の文明を経て來たこの複雑な内容の多い現實に居る我々は、決してか様な生温い理想に満足する事は出来ぬ、且世界は最初から決して完全なものである筈がない、不完全なものかあればこそ我々の努力によつて新しい世界を開拓し、理想の世界をクリエイトして行く必要がある、現實世界を忘れたる理想世界を考

へる事は出来ぬ、今日は何處迄も活動主義でなければならぬ。と云ふのがオイケンの考である。この永遠の世界、價値の世界を理想する時は、我々は昔の理想主義の如きものに満足する事は出来ない、昔の理想主義は何もしないで居る至極暢氣な事であるが、そんな事で充分であるとは決して云はれぬ、我々は充分に働かなくてはならぬ。藝術知識の様なものは人間の意志の力によつて出来る、昔は眞理は人の考によつて出来る考へて居たけれども、夫れは誤であつて、眞理は實行、活動によつて得られる、我々の眞の行動の結果として得られる、と云ふのがオイケンの考で、即ち活動主義である。眞の行動とは動物的に手足を動かすのではなく、大なる生命と意志と一致するときは活動しないでは居れぬ様になる、即ち之である。これによつて實行して行く事に於て、眞善美の具備した理想は表はれると考へるのである。

かゝる事によつて、十九世紀の科學的文明に對して精神的の活動主義が盛に唱へられた。而し之等の人々も自然科學を無視するのではない、科學の效果價値は充分に之を認めて其發達する事を希ふのは勿論である。然し其色々に領分を分けた科學を、唯集めたと云ふ丈では、人生にも世界にもならぬ、人生世界を全体として見る時は、之と異なる方法でなくてはならぬ、決して其價値を疑ふのではないけれども、科學の集つた丈では全体を捉へる事は出来ない、而し夫れ夫れの領分では、勿論科學の教によつて進まねばならぬ、唯科學萬能に反對して、人生を異つた解釋で見ねばならぬと云ふのである。斯くの如き精神的の生活によつて、眞の人生の價値は認められる、それと同時にもう一つは、科學そのもの、基礎の定まるもの、又この精神的の生活によるものである、其の眞の理想を表はす科學、美の理想を表はす藝術、善の理想を表はす道德によつて、眞の文明は成り立つものである、之等は文明の主なる領分であつて、それは又この精神的活動によつて、價値

と意義とが定まり、而して將來の發展を望むのである。

今日我が國にもかゝる思想が多く入つて來て、珍らしくもなく、又話し方も拙いので、甚だ不完全、不都合であつたが、兎に角我々は、科學の價値を認めると同時に、其根本に今少し偉大なもの、あるのを忘れず、其方面に努力すべきである。面らば科學・藝術・道德・宗教は、之によつて基礎を定め、健全な發達を遂げるであらふと思ふ。(完)

女子教育及び婦人問題に関する参考書

(一)生徒心理の方面の研究及び感想

編者	書名	發行所	發行年月	定價
大島居次郎	男女の研究	光風館	明治三七、六	五〇
加藤咄堂	女性觀	井洸堂	三七、一一	三五
○片山正雄	男女の天才	大日本圖書株式會社	三九、一一	六五
大島居次郎	婦人觀論	光風館	四〇、六	五〇
伊賀駒吉郎	女性觀	寶文館	四〇、一二	二、五〇
堺利彦	男女關係の進化	有樂社	四一、五	三〇
○ヘンリーマリオン著 前田長太譯	女性の心理	開發社	四一、九	六五
○大澤謙二	生理學上の婦人の本分	大倉書店	四一、一〇	五五
澤田順次郎	雌雄進化的論	博文館	四二、三	四五
メチニコフ原著	人種進化論	大日本文明協會	四三、一一	一一